

に、一方で公認五(現在六)宗教が定められ「宗教」概念の外延は国家によって管理されることになった。とりわけ反共産主義を旗印に成立したスハルト体制下における「無宗教」共産主義者」という言説の登場は、「宗教」概念に不可疑の権威を与える結果となった。

本発表でとりあげるのは、西スマトラの事例である。西スマトラに数多く暮らすミナンカバウ人は、母系社会としてよく知られているが、インドネシアの中でもとりわけ熱心なムスリムとして知られている人々である。一九世紀前半には、メッカに留学してワッハブ派の影響をうけたミナンカバウ人によってイスラーム改革運動がこの地に起こり、慣習法を重要視するグループとの間でパドリ戦争が勃発している。

二〇〇九年九月三〇日、西スマトラ沖で発生した地震では、州都パダンでは多数の建造物が倒壊し大きな被害が出た。しかし最も大きな被害が出たのは、西スマトラ州のタンディケ県にある山間の三つの村であった。これらの村では大規模な崩れが起こり、数百名が生き埋めになってしまったのである。これらの被害者の搜索が難航する中、西スマトラ州政府は間もなく搜索の打ち切りを考え始め、それを正当化するためにインドネシアウラマー評議会(MUI)に「ファトワ」の諮問をおこなった。それに答える形でMUIは、搜索の打ち切りと、村をそのまま集団埋葬地としても構わないとの「ファトワ」を出した。ところがこの「ファトワ」に対し、地元住民はあくまで身内の搜索継続をもとめて反発した。さらにパリアマン県政府も住民たちに同調して、「ファトワ」に従わずに搜索を継続する

ことを主張した。パリアマン県知事はテレビ番組でMUIの西スマトラ支部長と討論し「ファトワ」は宗教としては正論だが、住民の感情や慣習法にも配慮しなければならないと述べた。特に彼が強調したのは、埋葬に関して母系社会のミナンカバウでは男性の死者は出身村に帰って埋葬する必要があるという点であった。震災によって日常的な葬送システムが機能しなくなる中、普段は意識されない「民俗」と「宗教」の「ずれ」が表面化したものといえる。またその後のネット等での議論などを見ても、この出来事をきっかけに、従来疑われることのなかった「宗教」概念に再帰的な視線を向ける人々が表れつつあり、インドネシア社会における「宗教」概念は震災を機に大きな変化に直面しつつあるといえる。

霊場の意味付と顕在化する「違和感」

——災害後の熊野を事例に——

天田 顕徳

二〇一一年。それは災害の年と呼べるかもしれない。多くの犠牲者を出した三月十一日から半年ほどの九月初旬、紀伊半島は豪雨に襲われていた。台風十二号による「紀伊半島豪雨」である。この記録的な豪雨は、紀伊半島に深い爪痕を残し、様々なものを暴力的に奪い去った。多くの命や日常生活、家屋、財産——、そうした傷つけられ、場合によっては失われた数多くのものの一つに、長い信仰の歴史を持つ熊野の社寺や宗教的な風景がある。本報告では、まず①紀伊半島豪雨により被災した日本の代表的な霊場熊野の被災状況を概観し、②宗教者と地元

観光ガイドの会メンバーを中心とする地元住民からの台風被害に関する聞き取り調査の一端を報告した後、③調査結果に基づき、事例への考察を加える。以上①②③の作業を通じ、台風を通して明らかにになった現在の霊場熊野が抱える特徴やジレンマに光を当てていくことが本報告の目的である。

昨年日本を襲った台風十二号に何よりも特徴的だったのは、周囲に凄まじい豪雨をもたらした点である。「紀伊半島豪雨」と名付けられた未曾有の豪雨は、熊野の社殿堂塔に深刻な被害を与えている。とりわけ被害の大きかった熊野那智大社では、本殿第五殿が裏山の土砂崩れに巻き込まれ一部が埋没した。また、那智の滝で有名な飛瀧神社では拝所の一部が崩落。その他、一部浸水などの細かな事例を挙げれば際限のない程、社殿や堂塔に関する多くの被災状況が現在までに報告されている。また、今回の台風が霊場熊野に与えたインパクトとして見逃せないのが、信仰の対象となっている自然景観に与えたダメージである。熊野川の下流に位置し、豊かな緑をたたえた小島「御船島」は、熊野大神が初めに降り立った場所という伝承を持ち、地域の人々から大切にされてきた。熊野速玉大社の例大祭の舞台ともなっているこの島は、今回の台風により、ほぼ全ての木々が流され、その姿を大きく変えてしまった。また、那智の滝の下流にあり、不動明王の霊験譚を持つ小さな滝も上部の崩落によりその姿を消している。

現在の熊野において、先に紹介したいくつかの社殿や景観は世界遺産として登録・管理されているが、遺産登録に際し行った、施設や景観の「現状」のリストアップは、本来、自然の営

為によりその姿を変えることが当然であった信仰対象の柔軟性を損なう行為であったとも分析できる。世界遺産化が熊野に多くの人を呼んだ一方で、台風により熊野が「壊れてしまった」といった感情を惹起してしまう世界遺産化登録の功罪とどう付き合うかも台風で明らかになった現地の課題といえるだろう。

現在の熊野は「熊野詣」や「西国巡礼一番札所」というキーワードに象徴される、「霊場」としての顔の他に、世界遺産としての顔や、観光地としての顔を持っていることは議論を待たない。今回の台風は、複数の顔を持つ熊野において、数ある場所の意味付けの上でバランスを取りながら活動してきた、地元の宗教者やガイドの会メンバーにも衝撃を与えた。「宗教」が熊野における重要な観光資源となる中で、両者はそれぞれの立場において、熊野信仰や社寺の歴史・伝統を語ってきたが、台風のインパクトを経て両者は「信仰」を観光資源とすることに對する一種罪悪感にも似た「違和感」を表明している。宗教の商品化に對するこうした違和感は、西欧プロテスタント的な、「宗教的信念」に基づく、「プロテスト」というよりも、遥かに曖昧な一種の「情緒」や「情念」とも呼べるものである。今回の台風は、柳川啓一が「信仰なき宗教」と呼んだ日本人の宗教性を発火させたともいえるだろう。ともあれ、被災後間のない熊野が、「霊場」と「観光地」の狭間で今後どのようにハンドルを切っていくのか。熊野は刮目すべき状況にある。